

## 遺児の想い

菊川市遺族会 山田いち

私は父と言う人を全く知りません。私が生後1歳2ヶ月の時、戦死したからです。母は24歳、結婚生活3年、伴に過ごしたのはわずか1年足らずと聞いていました。何とも短い女の幸せでした。面会が許され、6ヶ月の私をおんぶして名古屋まで会いに行き、その時写したというたった1枚の親子三人の写真が、私と父との唯一の証です。

一家の大黒柱を失い、戦中・戦後の厳しい中、どの様に過ごしてきたのでしょうか。生きる為、私を育てる為、言葉では言い尽くせない苦勞の毎日だったと思います。幸いにも我が家では祖父が健在でしたので、家業の農業を続け、私も小学生の頃より、お茶摘み、田植え、稲刈りと、田んぼや畑に出てお手伝いしたものでした。その当時、地域の中では「遺族」と言うと優遇されていた様で、青年団の人達が勤勞奉仕との事で農作業の手伝いに来て下さったり、お盆やお彼岸にはお墓参りに来て下さったりしたものでした。祖父のおかげか、又、私が父親と言う人の存在を知らない為か、父親のいない寂しさ、という事は余り感ずることもなく成長しました。

けれども、こんな事がありました。それは中学三年生の時、高校への入学願書を提出した日の事でした。学校から帰った私は、思わずお仏壇の前で泣き伏してしまいました。「お父さん、どうして死んじゃったの…。お父さんさえ生きてくれたら…。お父さん…」私には中学になり、続けていた好きな事があり、どうしても行きたい志望校があったのです。けれども祖父は、「農業高校へ行け」と言うのです。父の死と共に、私の将来は決まった様なものでした。「お前は家とりだから、農業をやらなければ…」と事あるごとに言われ、期待をかけられてきました。私も、そうしなければならぬのかなあ、という気持ちはありましたが、それだけに、高校までは自分の好きな道を行きたい、卒業したら必ず家に入ります、農業をやります、と、どんなにお願いしても許してもらえませんでした。「親がないと思い一生懸命育ててきたのに、わがままにも程がある。そんな学校なら家では高校へはやれない!!」と言うのです。祖父と私の間に入って母は戸惑うばかり…。そのあげく、涙ながらに「ごめんね、おじいさんの言う事をきいておくれ…」と言う母の言葉に私が折れたのでした。祖父にしてみれば、息子亡き後この孫を育て、この家を守っていかなければ、という大きな責任を感じていたのかもしれませんが、その時の私は、まるで悲劇の主人公にでもなった様な気持ちで嘆き悲しんだものでした。そして私は祖父の言う通りの道を歩み、家を守り、現在、息子に引き継いでいるのです。戦争さえな

かったら、お父さんが生きていたら、私の人生は…と思った事もありましたが、祖父と母の旅立つ時の、本当に安らかな寝顔を見た時、与えられた道を精一杯生きて来た自分を納得することが出来ました。

戦後 77 年を迎え、私達の国はこんなにも平和な国となりました。これは、英霊となられた皆様の犠牲と、御加護、そして国民の皆様の必死の努力の賜と思います。戦争は絶対に反対です。戦争遺児は私達限りで思っておりましたのに、毎日報道されているロシアとウクライナの戦争、断腸の思いです。武力ではなく、言葉の力では解決できないのでしょうか。世界中の人々が平和を願っているのです。遺児である私達は、心の底から、強く、強く願っているのです。

戦争のない平和な世の中であります事を…それが亡き父への親孝行であり、御供養と思うのです。

### 父、母、そして私

菊川市遺族会 室屋近子

私は、戦争を知らない子供達と同様、戦争の記憶がありません。

昭和 19 年 4 月 12 日（西暦 1944 年）菊川市（旧堀之内）に生まれ、現在に至っております。

父の名は森下静三（もりした しずぞう）。父が戦死したのは昭和 20 年 5 月 28 日（西暦 1945 年）33 歳（大正元年 11 月 15 日生）。昭和 19 年 11 月に静岡三四連隊に入隊、満州第二〇四一部隊に編入、シベリアのジャジヨール、ナヤ、陸軍兵長。このことは、菊川市遺族会（旧菊川町）の平和の礎の中に記録されています。

もう少し長く生きていれば終戦を迎えることが出来たのに、残念でなりません。

父は抑留され、食べるものもなく、隣に寝ていた方が声を掛けた時にはもう息をしていなかったそうです。骨と皮、栄養状態は極めて悪く戦病死とのこと、この話は母からではなく、私の従姉妹から聞いた話です。私には父の記憶はありません。

母は、私の為に再婚という道を選んだのだと思います。父が戦死した時に一番苦労したのは母なのです。母は嫁ぎ先から出され、行くあてもなく母の実家に身を寄せることとなり、私の記憶では、昔の物置小屋にむしろが二枚板の上に敷いてあったのを覚えています。

母が近くの工場へ行く姿には、母が何処かへ行ってしまわないかと大

きな声で泣き、夕方近くになると、母が帰って来る夕陽のさす道に座って薄暗くなるまで待ち続けていた事、「カラスなぜ泣くの、カラスは山にかわいい七つの子があるからよ」という歌が流れると、その風景が、今もって思い出し私の心から離れた事はありません。

小学校に入る少し前に、「お父さんだよ」と母に言われた時には、私にもお父さんと呼ぶ人が出来たと喜び、嬉しくもありました。

小学校一年の時、妹が生まれ、母があまり丈夫な方ではなかったので、ご飯の支度、義父と妹と自分のお弁当を出来る範囲で作った事は、今では良き思い出です。

中学三年の時、義父から「中学出たら働くんだよ」と言われ、お世話になったから、ここまで育ててくれたから、恩を返さなければならないという気持ちがありました。素直に受け止められず、とても悲しく、母には言えませんでした。

数日後、母が「上の学校へ行けるよ」と言って、「公立はだめだけど、私立で、試験日は公立と同じ日になるけど、話を決めて、担当の先生にお願いしたよ」と話してくれたと聞いた時は嬉しかった。本当に嬉しかった。

後日、母が義父に「お願いだから妹と同じ様にしてね」と言う話を聞いてしまい、やはり私は早くこの家から出なければならない、という気持ちと、私のために自分をさておき母はいつも見守り続けてくれた事、感謝すると共にそれを受け入れた義父にも感謝しています。

義父は平成元年 11 月 16 日享年 77 歳にて永眠いたしました。

母は大正 4 年 4 月 4 日生れ（西暦 1915 年）、母も義父の死後 10 カ月後の平成 2 年（西暦 1990 年）9 月 26 日永眠いたしました、享年 75 歳。

「母の心の中では、戦争は終わっていなかったのではないか、と思われてなりません」

母は、陰ながら遺族会の会員名簿に私の名前を挙げてくれた。お陰で、今現在このようにして遺族会のお手伝いのできた事、皆様のご協力が無ければ出来ない事に感謝の気持ちで一杯です。

そして戦争は、決して、決してあってはならないと切に感じます。

### 戦死した父への想いと戦後の生活

菊川市遺族会 鈴木好雄

私は昭和 17 年 3 月 31 日生まれなので、今年 80 歳になりました。

昭和 19 年 10 月父（鈴木福次）は召集令状（赤紙）により出征することにな

りました。その時、家族は年齢順に曾祖母（73歳）、祖父（58歳）、母（28歳）、叔母（23歳）、私（2歳）、弟（0歳）でした。家族を残して出兵する父の想いは如何ばかりであったかと思います。その頃既に米軍は6月サイパン島に上陸、7月にはグアム島に上陸し守備隊は全滅し、敗戦は濃厚でした。

父は岐阜連隊に入隊し、その後送られたのは満州（中国東北部）の最果ての地ハイラル（現在の中国内モンゴル自治区フルンボイル市）でした。ハイラルはソ連との国境の近く、大興安嶺の西側にあります。戦地から送られた父からの軍事郵便がいくつか残っています。

昭和20年8月8日、突如ソ連は日ソ中立条約を破棄し、多数の戦車を先頭にして満州へなだれこんできたのです。当時満州の日本軍は兵力も装備（小銃と手榴弾くらい）も貧弱でしたから、ソ連軍の機甲化部隊を前にして為す術もなかったと思います。

父は昭和20年8月13日満州のハイラル（海拉爾）で戦死したと祖父から聞いています。戦後になって父の葬儀は行われましたが、遺骨もない空箱でした。父の遺骨は現在でも満州かシベリアのどこかに眠っています。父は大正2年6月16日生まれですから、32歳で戦死したことになります。母が29歳の時です。今から考えても残念無念であったと思います。

満州やシベリアの冬はマイナス50度にもなり、まさに極寒です。まともな防寒具もなく、兵器も少なく特に弾薬がなかったようです。南方戦線が重点であり、満州は日ソ中立条約で安心と思われたようです。また、当時の戦争指導者たちは、まったく無能で米英との交渉をソ連に依頼するなど、スターリンの残忍さも国際情勢も分かっていなかったのです。それ故、無謀な戦争をしたのです。

いずれにしても、父は結婚3年で妻と幼子2人、家族を残して最果ての地満州のハイラルで命を落としました。このことは残念であったと思います。

鈴木家の家業は農業でありました。茶、米、麦、それと野菜を栽培していました。それ以上にたいへんだったのは、養鶏業でした。主たる働き手であった父が出征したので養蚕業はやめましたが、残された家族はととてもたいへんでした。畑や田んぼの仕事だけでもたいへんなのに、さらに養鶏は100羽以上も飼い、六郷地区で一番多かったと思います。しかも受精卵をとるための養鶏業だったので保健所が検査に来ました。雄鶏が一羽と十数羽の雌鶏が一部屋にいて、それが数部屋ありました。生き物の世話は想像以上にたいへんでしたが、鶏たちは祖父や母にととても懐いていました。

戦後の主たる働き手は祖父と母でしたから、子供から見てもたいへんそうですし、私達も小学生低学年の時から手伝いは当然のことでした。茶畑や田んぼの仕事にしても現在の様に機械化していませんでした。お茶は茶ばさみでした。田んぼは鍬と鎌だけでした。特に、お茶摘み時はたいへんでしたので同じ地区の中学卒業したばかりの娘さん二人に頼んで朝5時半から夕方7時半くらいまで働きました。牧之原にも茶園があり、共同の茶工場は神尾にあり、リヤカーによる往復だけでもたいへんでした。

現在神尾から牧之原までは舗装道路ですが、昔は旧道の石ころだらけの急坂（通称、はん坂）でした。母は、その急な坂道を一人で角籠にお茶を詰めてリヤカーで往復したのです。祖父は80歳になるまでお茶工場の仕事をしましたから、お茶刈りは母が主でした。

6月の二番茶のとき、梅雨であり本降りの中でも茶刈もしました。雨水で茶葉が重くなり28%も割引されました。私は高校生の頃より、夏休みは茶工場で蒸しの助手として働きました。当時の燃料は石炭と木炭でした。工場の機械はすべて1台のモーターで動いていました。

その後、私は高校を卒業し祖父が引退し、養鶏はやめて専業農家になりました。茶畑を拡大するために原野を購入しブルドーザーで開墾、茶樹は藪北品種へ改植をしました。平成四年から平成14年頃のお茶産業は好況でした。現在からすると好い時代であったと思います。

現在、夫婦で少しばかりのお米を作り野菜作りも出来、子供3人、孫5人、みんな元気で過ごすことが出来るのは、先祖、祖父、母そして亡き父のお陰と感謝しています。

しかし、最近のロシアによる一方的なウクライナ侵攻で数多くの民間人が命を落としています。戦争が今の時代に起こることは、戦後80年もたつ日本では考えられません。戦争が一国のトップの考えで始められます。終戦後も何年も、領国と世界に多大な損失と犠牲を残します。一刻も早く終戦を迎え、世界平和が迎えられるように願うばかりです。

### 戦没者家族の思い

菊川市遺族会 中山猛

私の父親は昭和19年8月フィリピンのミンダナオ島で亡くなりました。25歳でした。

そしてその年の12月東南海地震で我家が潰れ、翌年何度目かの余震で揺れる中、仮設の小屋の中で、私は生まれました。

私を育ててくれた父も既に亡くなり、母も昨年 100 歳で他界しました。二人とも戦後の混乱期から、私たち兄弟を育ててくれました。

一昨年父親の軍歴を知りたくて調べたところ、詳しい情報はありませんでした。でも、それまでずっと戦死と思っていたのですが、実際はマラリアによる戦病死でした。陸軍工兵でジャングルの中など、大変な苦勞をされたと思います。

一度もあったことのない父親ですが、一つだけ、私に残してくれた宝物があります。それはジャバラ式のカメラです。今では全然使えませんが、私の写真好きの原点となっています。

私は父親の三倍以上を生きて、平和に過ごしてきましたが、現在ロシアのウクライナへの攻撃を思うと、心配でなりません。

戦争は肉親を亡くし、また離れ離れにし、人々の日常を一瞬に奪ってしまいます。

一刻も早いロシアの停戦撤退を、強く思います。

## 父と母の一端の面影

菊川市遺族会 落合判俊

### ～父の面影～

私の父、吉松（輝光院真忠吉玄居士）は昭和 19 年旧満州に出征後、シベリアに強制抑留され、昭和 22 年 6 月に舞鶴港を経て復員し、間を置くことなく腸チフスを患い、小出（現六郷小学校の南近辺）の隔離病舎に収容され、1 ヶ月後の 7 月 18 日、33 歳で死別しました。私が 5 歳の時でした。

極寒地の抑留先で森林の木の伐採、重労働で食料も十分に与えられず、時にはネズミやカエルなども食し、栄養失調で体力も衰え、急激に食べ物や環境が変わり、体がついていかず疾患したようです。隔離中は家族も一切面会できず、私も父の顔を見ることも、話をすることもできませんでした。

父親の姿が記憶に淡く残っているのは、父に左手を引かれ、当時の堀之内駅（現菊川駅）から徒歩で 10 分足らずの自宅に帰る途上、潮海寺の人から「吉松っあ、帰ってこれでよかったなあ」と声をかけられたことと、国防色の兵服と足元をゲートルで巻いた父の後ろ姿だけがおぼろげに残っている程度です。私自身、今回の投稿を機に一つでも多く父の抑留生活の様相を知りたく、昭和 56 年発刊の「シベリア抑留体験記(シベリア抑留の体験を語り継ごう会・刊行)」を読み返しました。第二次世界大戦後、シベリアに抑留され、厳しい寒さの中で過酷な労働を強いられた 450 余人の生の声（収容所・労働・酷寒・死・食・

衛生のこと等) が生々と語り継がれています。父もこの「シベリア抑留体験記」350 ページの中に重ね合わせる事が数多くあり、戦争での悲惨さをまざまざと感じさせられます。

父との会話もなかった私にはこの「体験記」のお陰で、父が味わった、辛く、厳しかった状況を代弁してくれている、貴重な手引きとなっています。

～私の僅かな記憶～

- ◆頭の上をB29爆撃機が「グォーグォー」と凄まじい音をたて、通り過ぎていく時の恐怖感。
- ◆近所の人と何人かで固まって、近くの防空壕へ急いで避難したこと。
- ◆牧之原飛行場が空襲で、東の空が真っ赤に燃えている光景。
- ◆ジープに乗った2人の進駐軍兵士から貰った、チョコとガムの味、うっすらと記憶があります。

～母の面影～

母は私が中学校の頃まで、近所の同じ境遇の戦争未亡人の仲間2～3人と、ほぼ毎日、朝夕、20kg余のお米を担いで、静岡や熱海の旅館・寿司屋へ行商に行き、帰ってくると「今日は闇米摘発の鉄道公安官がいなくてよかったやあ」とほっとつぶやいたことを度々覚えています。長い間、骨身を削り父親代わりとなって、女手ひとつで姉たつ子(79歳で他界)と私を育ててくれました。母さき(真苑妙陽尼上座)は平成5年3月、74歳で他界しましたが、生きているうちにもっと「父のことを聞いたり」「孝行しておけばよかったのになあ」と悔やみます。通夜付添いの夜、枕元の赤い表紙の日記帳の中に、遺族会の人達で東北の旅に行った時に母が詠んだ一句がありました。

旅にいで この松島の景色をば 我だけ見ゆぬ <sup>あなた</sup>亡夫にすまぬ

この句を読んで、若くして死別した夫への妻としての凝縮した一途な思いが感じられ、つい私も目頭が熱くなり、おふくろの冷たくなった手を握りしめ、涙を流したものでした。また、十三回忌供養の前年、平成16年4月の墓地修復の入魂供養の際、母の遺骨を夫の墓石内に合祀することが叶い、ひと区切りのついた供養となりました。

今日、世界中で人種や宗教的な争いで紛争が絶えません。無謀で非人間的なウクライナ軍事侵攻も一日も早く終結して、戦争による犠牲者や私達のような戦争遺児をこれ以上出さないことを願うばかりです。

戦後 77 年が過ぎて、この度、菊川市遺族会により「次世代へ伝えたい、戦没者家族の想い」の発刊の機会を得て、父と母の一端を投稿できることを、心から感謝を申し上げます。有難うございました。

### 小学生の兄が白木の箱を胸に

菊川市遺族会 平松とみ

今年も 5 月の母の日、八十路やそじに入った私は、3 人の子供夫婦に感謝で祝いをもらいました。

そんな時いつも思い出しますが、私が小学生の頃、母の日によせて学校で作文を書かされました。そして何人か校内放送されるのですが、いつも私はその中に入っていたのです。

大人になり母となって初めて気付いたのです。私の書いた文章が良かったとかではありません。母の生き方が小学生の私がどう見ても大変な毎日であった事を、先生方が感じて下さったのでしょう。

父の出征時、家には 5 人の子供と母のお腹は 6 ヶ月の身重みおもでした。

その後、父は 33 歳で昭和 19 年 8 月 19 日バシー海峡で戦死。母と子供達だけが残されたのです。

その時、4 歳であった私は写真で見る父の顔に「そうこの人が私のお父さん」と思う気持ちと、一つだけの思い出は、兄弟に置いてけぼりになって泣いている私を見つけてくれた父が、着物姿でおぶってその場につれて行ってくれました。

その時の父の背中と帯の黒さだけははっきりと覚えているのですが、その時の父の声も顔もどうしても思い出せないのです。

小学生になって間もない兄が、小さな学生帽と学生服の胸に白木の箱をかかえて、オート三輪の荷台から降り立った姿は今も忘れられません。

私は高校卒業後、近くの農協に勤めたのですが、そこの上司が、お母さんはお月夜にこの県道で自転車を練習していたんだよと、永い間覚えていて下さっていました。

鮮魚商をしていた父の仕事は母がやらなければならず、戦後、魚は配給制となり母は自転車に乗って魚の着く時間、夜中でも明日の配給の準備に出かけました。

順番に小笠、横地、内田と出掛け、子供達の夜は、近所の方が交代で朝まで泊まってくれました。

大雨の中、夜中にカッパを着て出かける母を、たまたま家に来ていた父の祖

母が雨の中出かける母を見送った後、いつまでもガラス窓に立っていたのを私もいつまでも見ていました。

大きくなった姉はよく学校を休み家の仕事を、兄は中学校から帰るのを待たれて、母の片うでとなって店の仕事をしてくれました。

29歳で夫を失い、女手一つで子供達を育て、店を守り抜き、94歳で父の元に逝ったその母が私達子供にいつも言っていた言葉は「みんなに助けられて生きて来られた」でした。

### 復員を待っていた家族と日章旗

菊川市遺族会 藤本春江

私の兄が出征し、終戦を迎えました。しばらくしたら出征した近所の皆さんが復員してくるようになりました。

私は、河城地区牧之原の六本松の通りに住んでいますが、ある日の夏、金谷駅方面から「コツコツ、コツコツ」という軍靴の音が近づいてきました。段々大きくなって家の前まで来たので、私は、飛び起きようとしたところ、そのまま靴の音は通り過ぎていきました。「フウ～」とため息をすると、同じ部屋に寝ていた家族みんなが深い息を吐きました。みんな私と同じように気にして目を覚ましていたのです。

毎日、そうした日々が続きました。そして、遂に帰って来ませんでした。

戦後、70年程経った平成10年代中頃、アメリカで「近所の人たちが寄せ書きした兄の日章旗」が見つかったと政府援護局から写真が送られてきました。日章旗の帰りを待ち望んでいたのですが、持ち主は、所持していた兵士の孫に当たる方で、「競売に掛けたい」との事でした。政府援護局の方は「金銭的な取引は望まない」という事でしたので、あきらめています。

代筆者一鈴木 榮

この文章は、日章旗が見つかった時、妹さんの自宅で私が伺った話を思い出して書き留めたものです。藤本春江さんは、平成の終わり頃亡くなり、娘さんは嫁ぎ、生家と土地は他人に渡っています。

### 死ぬまで帰ってくると信じていた戦没者の母 菊川市遺族会 鈴木榮

私は、昭和13年生まれですが、父の弟が海軍にいました。

私の記憶にはありませんが、家族全員で神奈川県横須賀基地に面会に行った時の写真があります。幼児の私が水兵服を着て、水兵服の叔父さんにダッコされている写真です。それを見ているとなぜか記憶にあるような気がして来ます。

公報によると昭和19年9月、西カロリン諸島ペリリュー島で玉砕したと、戦後白木の箱が送られて来ました。当時、27歳 独身でした。

その叔父が使っていたと言う座卓が畳の部屋にあり、子どもの頃、引き出しを開けて中の物で遊んでいると、普段は優しい祖母（戦没者の母）が、「英司（戦没者）が帰ってきて悲しむから触ってはだめ」と厳しい表情で怒られました。

もう、立派な墓も建っているのに、まだ、帰ってくると信じているその母親の姿に子供心にも感じるものがありました。

私も、子も、孫も、機会ある毎に墓参りをして、戦没者の墓から順に拝んでいます。

### 語り継ぐ戦争の記憶

菊川市遺族会 寺本達良

その日、昭和20年8月15日、青いというよりはすべてが白く見えるほどの快晴、だから8月15日の景色は、光り輝く白、まぶしさとにじみでる涙と頭の芯まで痛くなるような白。阿久悠さんの小説「瀬戸内少年野球団」で主人公の少年が書いた詩の一節にそうあります。

亡き人の面影と苦楽の涙とほろにがい忘れ物と戦後77年。水に映った空の青より淡い記憶からあの白を紡ぐ夏であります。

私の父は昭和20年8月28日シベリアに抑留中に栄養失調で亡くなりました。当時34歳でした。父の遺骨や遺品は何もありませんでした。

父との最後の思い出は、出征の日のこと、出征を見送ろうと家族で岐阜駅まで行くと遠くのホームに父の姿がありました。そして、私達を見た同僚兵士が手前の方に出してくれました。その時に目に入ったのは、父が提げていた竹筒の水筒でした。はっきりと覚えています。これでは戦争には勝てないと思いました。

そして終戦後、父のいない生活は母と共に大変でした。私が高校生になると、一家の長として地域の会合などに参加することになりましたが、周りは大人ばかりで相手にしてもらえませんでした。中には、遺族年金を沢山もらえていいね、という人までいて、父のいない悔しさを覚えました。この時、父の存在は貴重だと思いました。

この様に戦争は、本人はもちろん家族も皆辛い思いをするし、残る人は惨めな思いをする。絶対にやってはなりません。

しかし今、露軍とウクライナが長期戦に入りました。早い終結を願う一人で

す。

戦争は絶対にやってはなりません。

77年前の出来事を私は悲劇と呼びます。二度と同じ失敗を繰り返してはなりません。あの戦争に至った日本の誤りを正しく後々の世代に伝えていくことこそが残された私たちの努めなんです。

77年前に終わった戦争。時の流れの中で、色あせる戦禍の記憶を語り終わりといたします。

### 戦争はダメだ誰もが明るい家庭を

菊川市遺族会 海野昌久

今年も戦争が終結し76回目の終戦記念日8月15日がやってくる。

女手一つで私を育ててくれた母の苦労話、戦地の父からの軍事検閲を受けた手紙3通、21通のハガキ、軍隊写真、死亡認定理由書等、残された文書から戦争の残酷さと母の苦労が改めて見てとれます。

#### 「結婚と召集令状」

母末代は呉服商橋本屋の第一番頭海野俊司とお見合いで昭和16年10月8日結婚、父は結婚して1年にもならない17年7月16日徴用され名古屋の大同製鋼に入社。私は昭和18年4月16日に生まれる。

母が心配していた召集令状赤紙が8月16日にくる。静岡中部第三部隊に入隊する。

第三部隊は9月1日華北に出発。戦士として9月19日北支派遣泉第五三一六部隊鈴木（教）に配属される。この召集令状により、母一人子一人の父のいない厳しい生活が始まりました。

昭和19年、私が生まれて1年8カ月目の12月東南海地震があり、母は怖くてとても歩く事が出来ず、私を抱いて這って表に出たという怖い体験もしている。

空襲も何回もあり、昌久を抱いて防空壕に逃げた、怖くて、震えて家の中にいたという話を聞いている。母一人で子供を育てる、父のいない生活は大変であったと思います。

#### 「父と母の連絡」

戦地の父と母は、北支にいた父が昭和18年9月から戦地フィリピンへ出航した19年7月の間は、軍事検閲を受けた郵便ハガキ、手紙により、お互いの近況を連絡しあっていたようです。戦時中の夫婦生活がほんのわずかの間しか一緒に生活が出来なかった事は不幸であったと思う。

北支へ派遣後、北支派遣泉第五三一六部隊鈴木（教）として11通、北支派遣泉第五三〇九部隊永井隊として5通、北支派遣泉第五三一六部隊齊藤隊として3通、北支派遣泉第五三二〇部隊小野隊として2通の21通軍事ハガキがきている。父と母は軍事検閲を受けたハガキと手紙のやり取りで、私の成長を生きがいに厳しい兵役を務めたことが分かる。

北支も広く地区により所属部隊が違い、短い期間に前記4部隊を回って一人前の軍人になったと思われます。

父は、極寒の北支で兵役と兵隊になる為の大変厳しい特訓を受けたと思われます。

北支は10月頃になると氷点下30度と寒く、大変苦勞した父の苦しさが手紙から分かる。

軍事郵便を読むと私の成長をいつも心配し、順調に育っているかとか写真を送ってくれと。

「父より昭和18年末に一人前の兵隊になり戦場に派遣かと手紙」

昭和18年もあと4、5日となり正月の準備をしていると思うが北支の軍隊でも餅つきをしている。自分は検閲もようやく終わりやっと一人前の兵隊になったが、今戦地も戦時下でなかなか多忙にて新しい正月もこの北支で迎える事ができるかわからない。年があけると何処かへ行くかもしれないと承知しておいて欲しい。上官より煙草を賜ったが、自分は吸わないから親父、近所の人に一本ずつでも良いからやってくれ、自分は久しくお菓子を食べていないからあったら送ってくれ、そのまま菓子では送れないから用品とでも書いて送ってといじらしい言葉である。

戦争体験者から一人前の兵士になる為にケツバット等で殴られ鍛えられたと言う話を聞くと、親父も大変な苦しみを味わったと思う。今から戦場に向かうと思う父の本当の気持ちはどんな思いだったのだろうと戦争の恐ろしさを想う。

昭和18年は厳しい兵役と訓練を受け一人前の軍人になったが戦地への移動はなかった。

「昭和19年新春」

19年新春は北支で迎える。氷点下30度と非常に寒い、誰も日本では経験の無い寒さに防寒服で班内の戦友と記念撮影、今年は戦地への移動を誰もが覚悟していた事と思います。

父は写真の裏面に戦友の名前を書いて家に送って来ました。

「昭和 19 年 7 月戦闘に死を覚悟し参加、昌久を頼むと最後の手紙がくる。」  
蒙古にきて 3 か月元気一杯警備に奮闘、今が一番暑い時、北支はこれから日増しに涼しくなると、戦地は今討伐作戦に忙しい日が続いている。戦況は厳しく今や勝つか負けるかの重大危機、小生も日本男子と生まれこの聖戦に参加できる事は軍人本懐とする所であると書いている。軍人になった気持ちを言い、留守中は家の事は全部お前に頼む。昌久は丈夫に大きく育ててくれ、最後にお前たちの幸福を異郷の地より祈る。当分の間便りをされても今までの隊名では着かないから出さないでくれ、又俺も任地へ着いて手紙を出せるようなら度々出す故それからお前たちもどんどん送ってくれ。でも任地へ着いても出せないと思う。お前もくれぐれ身体に注意して心配せず元気に暮らしてくれと書かれている。

この手紙は死を覚悟した手紙と思われます。

「手紙発出後激戦地フィリピンに向け軍艦玉津丸で出航」

昭和 19 年 8 月泉第五三一六部隊鈴木(教)はフィリピンに向け軍艦玉津丸で出航、

8 月 19 日午前 4 時 20 分バシー海峡で米軍の魚雷攻撃で撃沈死亡する。

父より 19 年 7 月 11 日付の小荷物風呂敷包みが来ていることから着いた時は既に船の中か。その戦死を母は何も知らされず、手紙が途絶えても何処かで生きているものと思っていました。

翌 20 年 8 月 15 日に終戦を迎えても、何の連絡も無くその気持ちは変わりませんでした。

昭和 22 年 4 月 2 日に戦死公報が来て、その死亡を初めて知り 24 日に遺骨を掛川の天然寺に私昌久を連れ受け取りに行っている。魚雷による死亡の為、遺骨は無く白紙一枚と金 285 円(現在の消費者物価指数換算で約 4,332 円位)で、その時の母の悔しかったとのメモに、無念さが伝わってくる。

当時葬式は学校、お寺、自宅等で実施していましたが、4 月 25 日自宅葬として行いました。

「苦勞した母の子育て」

母は当時父の実家近くの南山で生活していましたが、メモに親子家無し主人無しで苦勞すると書いている。肩身が狭い思い昌久にも気の毒なため親子二人生家(菊川)の脇屋に住まわせてもらう事にして実家に戻る。仕事も無く食料も無い、その為静岡に闇米を肌着の中に入れ売りに行くも警察の取り締まりが厳しく、見つかり米を捨て逃げたとかして長く出来ず、土方仕事でトロッコ運

びを男の人と同じようになって働くも身体がもたず大変な苦勞をした。小間物の行商をし、その後、父が呉服販売橋本屋の第一番頭をしていたため雇ってもらい、呉服の行商をして生計を立てた。

昭和 24 年母の姉、中村りきの主人が病死、姉も長男一人の母子家庭になり、姉の家に同居させてもらう事にした。小さなお菓子と雜貨を商う坂上屋を開店。地区で商店は一軒の為繁盛した。また姉も橋本屋に使ってもらい二人で行商を始め自転車で菊川地内を回った。一日自転車で回るとは大変な仕事であった。姉妹で苦勞して商店と行商により 2 人の子供を育てた。私が昭和 33 年中学卒業時、息子達二人が大きくなり、いつまでも一緒に同居する事も出来ないという事で別居することにした。姉は坂上屋を止め、母は現在地に家を新築しお菓子や雜貨を商う「えびすや」を開店し生活を始めた。家の前に旭テック南工場が出来、高度成長時代に向かう中、昼食時母がつくるインスタントラーメン、おでんが工員皆様の食堂がわりにもなり昼食時は大変繁盛し、母はおばちゃん、おばちゃんと呼ばれ可愛がられた。地域の人にもお世話になり繁盛した。82 歳の生涯を終えた時、工員の一人が母の死を悼み寄せ文を書いてくださるなど、母は女手一つで私を育て、苦勞の中孫にも恵まれ、晩年は幸せな人生を送ったと思います。母の苦勞に心から感謝をしたい。

「父が生きていたら」

#### **戦争が憎らしい。絶対戦争はダメ**

自分が生まれた時には、父は徴用され名古屋の大同製鋼に入社していて何も知らない。父も自分を何日見たのだろうかと思う。戦争がなければ兄弟もあったかもしれない。残された父の写真をみると父と母は結婚後東京の親戚の家に遊びに行っている。又粋な帽子を被って、軍鶏を手に持った写真等多くの写真が保存されている。

この様な事を思うと、戦争が無ければ父、母、私も違った人生を歩いていたと思います。

#### **戦争が憎らしい。絶対戦争はダメ**

今後この様な誰も不幸にする戦争の無い明るい日々が送れる国にして頂きたいと思います。

## 父のこと 故戸塚昇（昭和 62 年記す）

菊川市遺族会 戸塚宏一

故 戸塚昇

大正 10 年 6 月 21 日 小笠郡笠原村山崎（現袋井市）に生まれる  
昭和 16 年 3 月 浜松師範学校を卒業  
昭和 17 年 4 月まで 榛原郡萩間村西萩間小学校に勤務  
昭和 17 年 4 月 静岡聯隊（中部第三部隊）に入隊  
昭和 17 年 11 月 26 日 中部支那湖北省信陽に到着警備・演習・  
作戦参加・補充兵教育に従事  
昭和 19 年 5 月 湘桂作戦に参加  
昭和 19 年 8 月 11 日 午前 10 時 30 分湖南省来陽県太平墟北方一キロ  
高地に於いて戦死 享年 22 歳

私は父を知らない。母の腹の中にいる時に出征してしまっていて、私が 1 歳 2 ヶ月の時に戦死してしまっているからである。父も自分も、写真でしかお互いを知らない。あと 4 年で、父の生きた年数の倍の年月を生きることになる。果たして、22 年しか生きられなかった父の過ごした人生の倍の内容の人生を、自分が持っているだろうか。父の写真を見る度に反問している。父というものの存在が、どのようなものか実感が無い。自分の子供達に、父親としてどのように接して良いのだろうか、疑問が常に付きまとう。

自分が 30 歳代の中頃、父の遺した歌が、靖国神社の発行した戦没者の遺稿集に採用された。

- ・初めての父となりたる喜びはその面ざしを想ひてやまず
- ・吾子の泣く声に目覚むれば戦友の寝息かすかに暗に流るる
- ・初めての吾子の笑顔を我知らず千里の涯に今日も銃とる

この歌が、自分に父の存在を実感させてくれた。ただ、この歌を詠む度に、涙が止まらなくて困る。

昨年 5 月、天理教から曹洞宗に改宗した時に、父の五十回忌を行い、父の遺稿集を母が発行した。その中から

- ・海隔つ二つの国で父となり母となりたる喜び思ふ
- ・額際我に似たりと言はるれば鏡い出して眺見るのみ
- ・日に月に我に似てくる便りある吾子の面ざしあれこれ想う
- ・今頃は吾子と添寝の夢なるか夜半過ぎし戦野虫の声みつ
- ・いとけなき吾子も明くれば二つなる父と呼ばれむ日を待ちつつ

- ・如何ならむ見目形する吾子なると氣負ひてあくる手はおののきつ
- ・我を見て笑むにあらねど我を見て笑む心地して時ぞ忘るる
- ・うつつなに夢路に吾子と逢ひぬれば片言いひて我にすがりぬ
- ・吾を見れば背中に隠れ顔のみをい出してはにかむ時ぞ待ちゐる
- ・吾を見て父と知るまじ吾を見て父と言ふまじ我は知れども

父の夢を見ることはなかった自分だが、初めて父の夢を見た。それは父が帰ってきた夢であった。

#### 父の辞世

- ・我一人の感情のみにこだはれず国を賭しての戦なりせば

(平成 25 年 3 月発行の「文苑きくがわ」より)

#### 父の記憶

菊川市遺族会 赤堀三千男

父との記憶は、自転車に乗せてもらい、あちこち連れて行ってもらったこと。数少ない思い出です。私が 6 歳の時に、赤紙を持った人が家に来ました。父は当時 35 歳でした。過去に兵役に従事して除隊した身でしたので、「自分はもう年だから」と言っていました。結局、静岡の陸軍歩兵第一一八連隊へ行くことになりました。

ある日、静岡の父の所へ面会に行きましたが、子どもだった私は騒いでいたので会うことができませんでした。父とはそれが最後でした。父は昭和 19 年 7 月 18 日にマリアナ諸島で亡くなりました。父が亡くなったと聞いて、当時の川上村を挙げてお葬式をしてくれました。同じように村でお葬式をした近所の方は、葬式をした後に戻ってきて、「お父さんに世話になった」と家まで報告に来てくれました。「もしかしたら父も戻ってきてくれるのでは」と思いましたが、父は戻っては来ませんでした。

母はその後、一人で私たち兄妹を育ててくれました。結婚してから 11 年しか夫婦で過ごしていません。気の毒だと思います。村の人たちが助けてくれましたが、食べるものに困らない人を見て、悔しい思いもしました。

戦後は靖国神社や静岡の護国神社へお参りに行きました。サイパン島への慰問に行く機会もあり、私は何度か現地へ向かいましたが、母は都合が合わず、行くことは叶いませんでした。

現地の人の話では、グアムは血の海だったと言います。今では観光地になっていますが、洞窟の中に野戦病院が築かれていたり、コンクリートに大きな穴が開いているのを見て、戦地だったことを実感しました。

(令和4年7月発行の「広報菊川」より)

### 三島の陸軍基地で面会

菊川市遺族会 樽林努

小さい頃に、家族みんなで菊川駅まで行って、そこから父が居た三島の陸軍基地に行ったのを覚えています。訓練している父に向かって手を振りましたが、父は訓練中なので反応がありませんでした。その後父は、満州に配属され、昭和18年8月23日にフィリピンへと送られ、昭和20年1月16日に戦死したと聞きました。

終戦から50年以上経って、生還した戦友会の方から現地の戦闘の様子を聞くことができました。当時を知る人から聞いた惨状は、50年以上が過ぎてもお、昨日のことのよう生々しいものでした。こうした話を聞き、改めて、戦争は二度と起こらないようにしてもらいたいと思います。

(令和4年7月発行の「広報菊川」より)

### 死んだとも思えない父

菊川市遺族会 内田昌義

私の父は、昭和20年にビルマで戦死しました。家族の元に訃報と一緒に箱が送られてきましたが、遺骨ではなく、切った写真が入っていただけでした。遺骨も何もないので、まだ死んだとも思えません。

終戦の年、私は六郷小学校の四年生でした。当時は学校に兵隊が駐留したので、分散授業と言って、極楽寺で勉強をしていました。四年生の時はほとんど学校へ行けませんでした。当時は油がなかったので、茶の実を拾い、絞って油を取ったり、学校の持っている山の松の木に傷をつけて、松ヤニを取ったりして油にしていました。

学校には「<sup>ほうあんてん</sup>奉安殿」という社<sup>やしら</sup>があって、そこへ最敬礼してから、教室に向かいました。教室に入ると回れ右をして、<sup>ごしんえい</sup>御真影にお辞儀をして、教育勅語を読みました。子どもも戦争の教育を受けていたんだと思います。

(令和4年7月発行の「広報菊川」より)

### 戦地から届いた遺書

菊川市遺族会 有海辰男

[令和4年7月発行「広報菊川」の掲載記事]

<sup>にしかた</sup>西方の有海辰男さんのお宅に、一冊のメモ帳が大切に残されています。辰男さんの叔祖父にあたる有海豊さんが戦地から送ったものです。

始めの数ページには、分隊長としての心構えなどが書かれていますが、途中

からは白紙のままです。めくっていくと、真ん中の1ページに鉛筆で「遺書」が書かれています。「最後の花を咲かせる時が参りました」「毛頭生還を期せず只及ぶ限り力を轟かして頑張ります」と戦地に赴く自分を鼓舞する言葉が並び、最後は「故郷の皆様 永久にサヨウナラ」と結ばれています。

豊さんは昭和20年5月18日に、沖縄で26歳の若さで戦死しています。この遺書を書いているとき、どんな気持ちだったのでしょうか。

### 軍人として短い一生

### 菊川市遺族会 堀井龍雄

生まれは満州、育ちは遠州、内田の里は皆良い衆、今年で成人式4回半となりました。人それぞれ、いろんな事を背負って生活しています。よく云われる波乱万丈の世の中を渡っていると思います。父の顔は写真でしか知りません。まして声も分かりません。

菊川市壮年部の発足当時は、80名以上の会員でした。自治会内で数人、同級生内で数人、同じ遺児の立場となった朋友がおります。

父は大正14年に豊橋の騎兵隊に入隊して昭和7年に満州へ配属となりました。

休暇で帰郷した時母との縁談が決まり、満州のハイラルに住み、そこで私は長男として誕生しました。その後、戦火も激しくなり、母は妹を身籠った身体で引揚げ船で帰国したと聞いております。この引揚げ船が半年遅れたら戦争孤児の問題にかかわったかも知れないと、帰国後に知らされたそうです。

父は各地の戦闘に参加し、昭和16年7月、小隊長として突撃し、コーリャン畑で敵弾が左胸を貫通して戦死に至りました。その時、懐中時計はコチコチと動いていたと聞いております。軍人として、38歳の短い一生でした。

祖父が、松浦石工さんを頼んで昭和17年に建立したお墓も、戦後50年を過ぎてセメントの目地も痛んだので、平成5年に青木石材店さんに改修工事をお願いして再建しました。平成6年に父の五十回忌の法要が済んで安心したのか、平成8年3月に79歳で母が他界しました。家族と相談の上、母は父のお墓に納めました。きっと天国から私達のことを見守っていてくれると思います。

両親からもらった命を大切に、人生百年時代を、まず目標は「米寿かな」を目指して頑張りたいと思います。